

では、労働者にこのような生活が許されるという現実には、フランス労働運動の闘いのあとを見る思いだった。

シュニウの村での生活の間に私は今後の旅のプランにそってホテルの予約をしたり、知人を訪ねての小旅行をしたり忙しかった。テレビは連日ドルの暴落を告げ、私と顔を合わせた友人達は必ず『ドルが下がって旅行も大変ですね』と気づかってくれた。シャトー・デュ・ロワールでの会議の日が近づくにつれ受入れ側としてレイモンは多忙になった。ホテルに泊る同志のための予約、そ

してホテルに泊ることが出来ないものためには、母親と二人暮しでかなり広い家に住んでいる同志ジョルジュの家が提供されることになり、レイモンの家の納屋でねむっていた古いマット等が次々車でジョルジュの家へ運びこまれた。

そして私はフランコを迎えるために、シャトー・デュ・ロワールの町のホテルに引き移った。いよいよ会議の日

(つづく)

## 西欧アナキスト見聞五十五日

前 田 幸 長

二年前、フランスのA O A (アナキスト労働者同盟)のレイモン・ポラトンからアナキストの国際集会を開きたいが、出席しないかといってきた。彼はぼくの姉平山房子の十余年来の友人で、三年前平山が渡欧したとき、ポラトン夫妻との友情を更に深いものとした。彼は、『われわれの集会はアナキストの世界連帯を真に期待するものたちの集まる場としたい。われわれの集会は何々

代表の集まる場でない、同志的信頼と友情のもとに肌に触れ合う話し合いをしたい』といってきた。ぼくは、彼のそういう意見に同調することができた。しかし、A O Aは常々F A F (フランス・アナキスト連盟)を目の敵とし、A O Aの機関紙アナシー上でF A Fの悪口(批判とは思えない)をいっていた。六八年のカララ国際会議を罵倒していた。だから、A O Aのいう集会とはどんな

ものか興味もたれたので出席すると返事した。

AOAのFAFに対する悪口に対し、FAFの方はAOAメンバーの個人的中傷を加えたりして、両者は互に泥のかけ合いをやっている。AOAがアナキスト国際運動の集会をすると発表すると、早速FAFのメンバーの者は彼の機関紙でこの集会を攻撃してきた。こういうFAFとAOAの泥試合は心ある者たちの顔をしかめさせている。フランスにおいては、このような関係はFAFとAOAの間だけのことではないらしい、FAFに對する批判があらゆるところから聞こえてくる。しかも最近フロン・リベルテールというのでき、FAFに敵意をもっているらしい。どうやらFAFが分裂したようなのだが、その間の事情ははっきりわからない。さらにイタリーにおいてもFAI（イタリー・アナ連）に對する批判が存在し、これもフランスの状況と似たものがあるらしい。一体どうなっているのか自分の眼で確かめたいと常々思っていた。そこでこの集会を一つの機会として仏伊のアナキスト運動の状況をこの眼で見ようとしてヨーロッパ旅行を決心し、できる限り多くのアナキストに会うことを目的として、今年の夏、七、八月の十五五日間の旅行計画をたてた。夏のヨーロッパはヴァカンスの時期だということを知らない訳ではなかったが、現地へ行

つてみるまでは実感として受け取れなかった。アナキストといえども労働者である。ヴァカンスは楽しむべしということで大半の同志は不在であった。また、渡欧前のほくには長過ぎるぐらゐに思えた十五五日の旅程は、あっちこっちと駆けずり回ったけれど、あつという間になくなってしまい、むしろ短かすぎた。そんな訳で初めの予定の三分の一も満たすことができなかった。フランス、イタリー、スイス、オランダ、ベルギー、イギリスの六ヶ国を回ったけれど、いずれもほんのかすめて通ったにすぎない。

アナキスト国際運動の集会は、七月二十一日と二十二日の二日間、フランスのシャト・デュ・ロワールというル・マンとツールの間にある小さな町で開かれることになった。

集会の前日の七月二十日、各地からの同志がシャト・デュ・ロワールに到着、レイモン・ボラトンの世話によるホテルに分宿した。フランス、イタリー、スペイン（亡命）、ベルギー、アメリカ、イギリス、ハンガリー、日本からの二十六名（その内、女性六名）であった。フランス側の出席者は二、三名の若い労働者を除いてすべてAOAのメンバーであった。ほくは、早速ル・モン

ド・リベルテール（FAFの機関紙）に對する意見をきいてみることにした。AOAのメンバーたちは、FAFに對してはそれを批判するというのではなく、アナキスト同志として認めないという態度であった。FAFは政（党）社会党と関係をもち、FAFの代表モリス・ジョワイヨはアナキストの名を用いて名士となり、レオ・フェレというシャンソン歌手らと一緒にTVに出演し、民族学の講話をしたりしている。ル・モンド・リベルテールという老舗を利用して本を売る商人であるという。彼らがFAFを脱退して、AOAを結成したその原因は、モリス・ジョワイヨの財力に物を言わせての専横にあったという。彼らのル・モンド・リベルテールに對する意見は、モリス・ジョワイヨと彼のとりまき二、三の者に對する個人的反感がそのままル・モンド・リベルテールに對する敵意となつていようけとれた。現在ル・モンド・リベルテールは、すでにモリス・ジョワイヨは隠退し、若者たちが主体となつており、AOAとのこういった関係は彼らは少しも関知していないのである。AOAのメンバーたちは、ウマニタ・ノヴァ（伊アナ連機関紙）とフリーダム（ロンドン）についてもル・モンド・リベルテールに對すると同様の意見であった。シシリイのフランコ・レッジョとアルフレッド・ボナン

ノとイギリスのジャネット・ウエイア（ブラッグ・フラグのメンバー）たちにも同じ質問を試みた。ところが彼らもまたこれらに對して批判的であつて、これらの老舗はただ新聞や本を作り、売るだけだという。新聞や本を作るといふことは大事なことで、それを売るといふことは大きな運動だ。しかもその新聞や本が売れるというのはすばらしいことではないかと反論すれば、彼らは伝統的な名のみを頼りとし、出版物を作り、売ることで十分だと考えている、その姿勢は批判されなければならぬ、といった。この時これを聴いた限りでは、ル・モンド・リベルテール、ウマニタ・ノヴァ、フリーダムに對する意見は、AOAのメンバーたちもフランコ・レッジョもアルフレッド・ボナンノもジャネット・ウエイアもみな同一意見とうけとれた。だからこの集会には同じ傾向のものが集まつたのかと思つた。しかし、実際は彼らの批判する態度には大きな相違があつた。例えば、ジャネットに英語の本について尋ねると彼女はそれならフリーダムで手に入るだろうと教えてくれたし、レッジョはウマニタ・ノヴァに紹介状を書いてくれた。つまり、彼らはウマニタ・ノヴァあるいはフリーダムを批判はするけれど、それらと接触があるということである。ところが一方、AOAはル・モンド・リベルテールと絶

交状態にあり、ぼくたちがル・モンド・リベルテールと接触することすら嫌う。後で分ったことだが、このことはOAだけに限ったことではなく、フランスは、もちろんすべてではないが、全体としてかたくなで、批判の相手とは接触しようとしないう傾向がみられた。批判は批判として、互に接触を断たないというイタリーのあり方は、イタ公と呼んでイタリー人をなんとなく軽んずる風のあるフランス人の方こそ見習うべきだと思った。ル・モンド・リベルテールもウマニタ・ノヴァもフリーダムも新聞や本を出版することで満足している姿勢が見られることは確かのような。だが、それを批判するにはそれだけの自信と覚悟がなければできないのではない。フランコ・レッキョならばこそないうることだと思った。

#### シャトー・デュ・ロワールの集会

二十一日午前の部

集会は、AOAのレイモン・ボーラトンとギイ・バド（ブリュセル）の二人の議事進行で始まった。

アメリカの学生ジム・ベネット（革命的アナキスト連盟（SRAE）のメンバー）がスペイン革命のときマルクスストと共闘した状況とその姿勢について質問した。亡命スペインのフェルナンド・フェレがそれに説明した

争うことをやめ、『アナキスト運動者のために』を発行した。これは各グループから論文を集め、まとめたもので、財政は各グループがその資力に応じて負担している。その他毎年カナダの連盟と大陸会議を組織している。

集会の前日、アメリカの新聞『ザ・マッチ七三年八月号（アリゾナ・発行人フレッド・ウドワース）がウドワースの手紙をそえてレイモン・ボーラトンに送られて来た。その手紙と紙上の記事によると『ジム・ベネットなるものが、アナキズム遊説の跡と称し、カナダ、合衆国、メキシコ等を回っているが、いかがわしい点がある。今回フランスのシャトー・デュ・ロワールの集会に彼の友人ダグラス・リチャードソンと共に出席するということが、彼はSRAEの代表なんかではない。われわれとしては彼に責任をもつことはできない。貴集会においても注意してほしい』というのであった。これについてジム・ベネットの意見を求めた。

『ザ・マッチ』はウドワース個人の新聞であって、グループではない。SRAEの発行物でもない。われわれはこの集会に出席するに当りSRAEの代表と称したことはない。なぜ、こんなことを書かれたのか分らない。私に対する中傷は悲しいが、こういった個人攻撃はアナ

が、途中でスペイン語で話したためぼくたちには理解できなかった（ベネットはスペイン語を解した）。マルクスストとの共闘という問題に関してギイ・バド（AOA、ブリュセル、製本工）は、共闘主義はどんな理由があっても絶対拒否しなければならない。第一インターにおいて、ロシアにおいて、スペインにおいて共闘主義とはいかなるものかをすでに経験済みである、といった。この原則に關して特に反対するものはなかった。

つづいてベネットは求められて、合衆国の状況について報告した。ヨーロッパ移民のアナキスト運動、二つの世界大戦の間の時期についてごく簡単に語り、一九四六年以来運動は細分化し、衰退した。一九六八年、ヴェトナム戦争に対する不満等、学生や人民の心理的情况によつて運動は再び活気づいた。一九六八年、アナキストはマオイズト、トロツキスト等の学生の種々の反体制運動と混り合っていた。やがて、アナキストたちはこれらの流れに対しそれらと距離をおくようになり、そしてより明確にアナキスト的な道を開始した。一九六九年、アナキズムを基礎とする互いにくつかの相違をもつアナキストの小グループが意見を交換し合つて、SRAE（社会革命的アナキスト連盟）を結成した。十七のグループと多数の個人が参加した。SRAEは他のグループと

キズムの混乱の反射である。こんなことは一日も早くお互いにやめたい、とベネットは言った。ダグラス・リチャードソンはSRAEのメンバーではなく、ベネットの個人的友人であつて、ボストン市のケイブル敷設工。彼らは夏のヴァカンスを利用してのヨーロッパ旅行のついでに集会に参加したのだと語った。集会後、ベネットはイングランドとウェルズとアイルランドへ、リチャードソンはデンマークから北欧へ向つた。

ダグラス・リチャードソンはアメリカにおける運動の一つとしてアナキストはフェミニスト運動を支持し、参加している。この運動の支援者は十八才から三十才までの女性で、彼女たちは女性解放と反戦の闘いをすすめていると語り、アメリカのアナキスト運動とフェミニスト運動の関りについて言及した。これについて、AOAのボーラトン、バド、ロベール・ダリアン（パリ。「イエスの生涯」等の著者）たちはアナキズム運動は人権解放の闘いであり、それはすべてを指すのだからフェミニスト運動を特にとりあげる必要はないと主張した。イタリーのアルフレッド・ボナンノ（カタリーニャ。「急進無政府主義」紙）は、フェミニスト運動も反戦、労働者解放等の運動と同様アナキズムの実践活動の一つとして

行われるべきだと主張した。これに関してイギリスのジャネット・ウエイア（看護婦）は『アナキスト運動の中においてさえも女性性は男性と平等という気がしない。多くの同志（男）はまだまだ偏見をもっている』と云った。ボナンノは『そうだ、そうだ』とこれを肯定し、『キヤッキヤ』と笑う。会場は各々一斉に発言をしはじめ、しばらく騒々しくなった。そして、ギイ・バドーは『女性解放の斗いは、人類の完全解放、すなわちオートリテ、ヒエラルキ及びタブーに対する斗いとの連合においてのみ効界的である』と大声を張りあげた。リチャードソン、ジャネット、ボナンノその他二、三の者は肩をすくめる。

## 二十一日午後の部

日本の情況について報告を求められた。ぼくが日本語で話し、平山がそれをほん訳することを申し出たが、時間がないと拒わられ、英語か仏語で話してくれと注文された。フランス人は仏語を、イタリー人は伊語を、スペイン人は西語、アメリカやイギリスは英語をそれぞれ自分たちの国の言葉でべらべらしゃべっているのに、日本人のぼくが日本語を話してなぜいかなのかと腹が立ち、気を悪くした。ぼくは話すのをやめ、平山が簡単に日本

の現状などについて語った。ポーラトンに嚴重抗議することにした。後で考えれば日本語の使えないことは始めから分っていたことであり、何語で話そうとどうでもいいことのようなのだが、ヨーロッパ人たちが自分たちの使いたれた言葉でどんどん発言しているのを見、聴いていると、つい日本人はひがみっぽくなるようだ。

スペイン運動についてフェルナンド・フェレが話した。スペイン語なのでぼくたちには分らなかったが、話の要旨は、亡命スペイン人にとってスペインに戻ることが大目的であり、スペイン国内にあるレジスタンス運動の組織とそれらとの連絡、スペインに帰ってからの運動をどのようにすすめるかが現在の課題である。しかし、CNT・FAIについてその関心がスペインにのみ向けられ、世界の動きには無関心であると批判した。そして、アナキズムの見通しについてスペインの若い世代のある部分は失望しており、どちらかといえば悲觀的だという発言があり、会場は静かになった。

ハンガリの旅行者が集会に参加し、ハンガリの状況を話した。ハンガリの四百五十年に及ぶ反権力斗争の歴史とコミュニストによって無惨にも押し潰された一九五六

年のブタベスト・コミュンの簡単な報告があった。現体制はボルシェビキ・ファシズムであり、抑圧、検閲、不測の監視、いたるところに密告者があり、その見分けがつかない、非常に危険であって、反体制のいかなるプロパガンタも不可能である。東欧には異論は存在してはならない。それは犯罪である。ハンガリ人民の出入国に際しては、関係官庁の十三の検印を必要とし（パスポートを見せてもらったが、検印がびっしり押されていた）、身体検査は嚴重をきわめ、手帳の各ページも調べられる。アナキズムをもちこむことは不可能である。しかし、それでもどこからか入ってくるらしく、アナキズムに関するものを秘裡に読むことができる。東欧では党員は特権階級である。党員の息子たちだけが、親が給料の十二％を支払うことで軍役を免れることができる。一九五六年に教会と米国の影響がハンガリ人民の反逆運動の中に浸透し、それはいまもつづいている。ハンガリの友人は小学校の用務員だといっていた。

## 二十二日

メッセージの披露などがあつた。つづいて情報連絡紙の発行が午前と午後になつて話し合われた。『世界アナキスト運動』の名称で情報紙の発行が提案された。現

在のAOAの機関紙アナルシーを廃刊し、レイモン・ポーラトンがその発行の責任をひきうける。資金はヨーロッパ、主としてフランスでひきうける。英仏伊の三カ国語で発行されねばならないが、それは不可能なので仏語で発行されることにし、それを各地で各国語に翻訳すること、必ず各地の情報を送ること、アナキズムのプロパガンタと情報のみの情報宣伝紙であること、タイプ印刷、定期刊行とすることなどが話し合われた。定期刊行については、月刊にするか三カ月毎にするかなどは資金と見合つてフランスに一任された。

午後の終りになって、AOAのギイ・バドーが『世界アナキスト運動』の集会の宣言として使う草案を読みあげた。というのは、集会の終りにル・マンの地方紙と社会党系労働組合新聞からインタビュウの申し込みがあり、その際説いたものであった。この記者会見の報告があったとき、肩をすくめて苦笑するものが多かった。その宣言草案の中でマルクシスト、レーニニスト、マオイスト、トロツキストなど左翼諸潮流を並べてそれらをすべて否定し、さらにコミュニズム、リベルテール、ソシヤリズム・リベルテール、アナルコ・サンジカリズム等

は真のアナキズムの類似もしくは変質にすぎないとアナ



キズムの諸傾向を否認した。

シシリーのフランコ・レッキョとアルフレッド・ボナノはこれを容認することはできないといって、宣言の撤回を要求した。左翼戦線における諸潮流の否定をここで述べる必要はまったくない、コミニズム・リベルテール、ソシャリズム・リベルテール、アナルコ・サンジカリズム等アナキズムにおける諸傾向をすべて否定するとき、現実的な実践はもはや存在しない。

これに対しAOAは、アナキズムは純粹でなければならぬ。いろいろの要素の混ったイデオロギーはアナキズムではないとの主張を繰返す。レッキョは宣言草案など作ること自体がナンセンスだとその廃棄を要求し、はげしく迫る。やむなく、宣言草案の前記の箇所を削除することで両者共にしぶしぶながら妥協をみた。

その修正された宣言はつぎのようである。

#### 宣言

AOAの招待により、全世界のアナキスト運動の同志たちが、一九七三年七月二十一日と二十二日、シャトール・デュ・ロワールに集まった。そして、ここに全員一致で宣言する。すなわち、アナキズムは昨日の如く今日もまたヒューマニズムの勝利に向って前進する人類憧憬の最高の表現である。

アナキズムは我々にとって、人間の本能と良心の最も純粹な、時代を超越したほとばしりである。そして、それがどんなに魅力的であつても一つの社会イデオロギーに限定されてはならない。

アナキズムは自由な進歩を妨げるすべてに対する永遠の反逆である。

アナキストは先駆者の理論の価値を確かに認めるものである。しかし、彼らがわれわれの主人であることを欲しないし、われわれがだれかの後継者になることをも欲しない。党派主義、教条主義、追随主義を導くすべての思想を容赦なく投げ捨てるであらう。

その後、約束の新聞記者とのインタビューがおこなわれた。AOAのポーラトンとバードが記者の質問に答えていた。翌日、ル・マンの二つの新聞に集會が紹介された。ぼくたちは、集會後イタリアに向って出発したので、八月再びフランスに戻った時、レイモン・ポーラトンがその新聞を見せてくれた。

ぼくは、新聞記者とのインタビューがあると知らされたとき、この集會のために尽したAOAの折角の努力も水の泡になったと思つた。ポーラトンは、ぼくたちの受け入れに親身の世話をしてくれた。彼は口数の少ない、

心優しい人柄だが、戦時中、『フェニクス1』の名で彼の首にナチス・ゲシュタポの懸賞金がかけられた地下レジスタンスの闘士であつた。彼は、そのレジスタンス運動についてド・ゴールの勢力を助長しただけであつて、むしろ人民解放を逆行させたと反ナチス・レジスタンス運動における自分の行動を若気の至りと悔んでいた。ぼくは、彼を信頼しうる同志の一人だと思ひ、彼の素朴な人柄には好感をもつことができる。しかし、アナキズムに関してはその心は極めて狭く、妥協をしらず、頑固である。ポーラトンのみではなく、AOAの二十余名のメンバー、この集會にはその半數が出席した、についても同じことがいえる。彼らは『純粹』ということを口癖にしている。『純粹』を保持しようと努力することはすばらしいことだと思ふ。しかし、その努力とは自分たちと異質なものを不純なものとして攻撃し、否定することだとは思わぬ。純粹でないものと接触すれば、自分たちの純粹さが損われると考えるのはあまり余裕のない姿勢である。彼らは妥協をしらず、かたくなに自分たちのからに閉じこもるだけである。その結果レッキョの指摘のように現実の實踐活動の範囲は狭められる。ぼくは、彼らの友情を感謝しつつも、自分の心が彼らから離れていくのをどうしようもなく感じた。

この集會の宣言の最初に出てくる『AOAの招待云々』の箇所について少しふれておきたい。アナキストの國際運動とその會議を開くことについて、フランスの各グループは特別の関心を示した。しかし、彼らは自分たちの主催する會議あるいは自分たちのイニシャチブによる運動の展開に熱心なのであつて、他のグループのそれについては素知らぬ顔であり、むしろそれらを認めようとならない。一九六八年のカララ會議はル・モンド・リベルテールのものであり、七一年のパリのそれはフロン・リベルテールのものであり、七三年のこの集會はAOAのものであるといったように、互いに本家争いをし、他の會議を否認する。これら各會議には何らの連けもない。FAF(ル・モンド・リベルテール)もORA(革命的アナキスト組織・機関紙フロン・リベルテール)もAOAもアナキスト國際運動に関心をもち、ぼくたちに日本同志との連けいと参加を求めたが、ぼくたちはこれらいずれに対しても素直に頷くことができなかった。フランスにおいては批判の相手はそのまま敵となる傾向があるように感じた。心の狭さはAOAだけのものではないようだ。

二十二日集會の終るのを待ちかねるようにして、その

夜ほくたちは、フランコ・レッジョとアルフレッド・ボナンノと共にイタリアへ向った。二人のシシリー人は、ほくたちをイタリアへ案内するため迎えに来てくれたので、彼らはそのついでに集会に顔を出したのだ、多分こんなことだろうと思っていたがと苦笑い。AOAのいう『世界アナキスト運動』に参加する意思はないとはつきりいった。そして、ほくたちに君たちはどう思うかと尋ねた。ほくたちは、AOAの姿勢には批判的だし、彼らの心の狭さにはむしろ嫌悪を感じる。しかし、参加不参加を今ここで決めることはできない。ポーラトンはほくたちにとって良き友人だと思うからだ。今後もおそらく彼らと接触はつくだろうと答えた。レッジョは『そうか。それはいい。』といった。彼はシシリー島のラグーサで十数年来アナキズム文庫『フィアコラ』の刊行をつづけている。彼の行動範囲は非常に広く、ヨーロッパ中を動き回っている。フランス、イタリアその他のヨーロッパ同志たちから信頼されているようであった。スミス・ロザンナのCIRA（アナキズム国際研究センター）のマリイ・クリスチスは彼を素晴らしい同志だと敬賞する。五十一才。アルフレッド・ボナンノは三十六才、ナポリ大とカタニーニ大の二つの大学で経済学と心理学の学位をとっているインテリだが、彼の言動はまっ

たく天真らん漫である。一九〇センチ、一〇〇キロ近い巨軀をゆすってキャッキヤッと笑いこぼる。二人の陽気なイタリア人に案内されてのイタリア旅行は笑いの連続、決して退屈することがなかった。

イタリアへの途中、スイスのロザンナに回り、CIRAで一泊することになった。イギリスのジャネット・ウエイアはCIRAはまだ知らないのだからぜひ行きたいと希望し、ロザンナまで同行することになった。シャトー・デュ・ロワールからリヨン行の夜行列車に乗った。レッジョは列車で同席したフランスの少年に向って、われわれはいまシャトー・デュ・ロワールで開かれたインタナショナルの集会の帰りだ、この列車の席にはフランス、イタリア、イギリス、日本が一緒だ。この列車は国際列車だと話しかけ、君はセバスチャン・フォール（一八五四〜一九四二）を知っているかと少年に尋ねた。知っているかと少年は答えた。『彼の書いたものを読んだか』『いや、読んだことはなし』『セバスチャン・フォールはフランスが世界に誇ることのできる素晴らしい教師だ。ぜひ読め』と早速プロパガンダをやる。ボナンノの目茶苦茶の英語とレッジョのイタリアの発音のフランス語、それに対しほくたちの日本的英語とフランス語で互にま

るで通じない。パリの病院で働いているジャネットの流暢な英語と仏語のおかげでなんとか意思が通じ合えたが彼女がいなくなるイタリア旅行はどうなるだろうとちょっと不安になる。

CIRAは、ヨーロッパの各地からアナキズムの研究を志す若い仲間が絶えず出入りしていた。トリノの若い夫婦にあつた。レッジョは彼らは真面目なとてもいい青年だとはめていた。ほくたちは旅行の時間がなくなり、トリノへはついに行くことができなかった。トリノは『エリゼ・ルクリエ社会研究サークル』の他、労働者グループなどがあり、運動も活発である。パオロ・カシアリというすぐれた同志にも会いたかったが、残念だった。CIRAでオランダのバス・モレルに会ったことは、ほくたちにとってまったくラッキーであった。彼はヴァカンスを利用して、ここに一週間滞在し、アナキズムを勉強していた。アムステルダムでの再会を約束した。最近にはヨーロッパだけでなく、日本から訪問者や問い合わせの手紙などもあつた。CIRAに着いた二十三日の午後、京都の学生ミキ・ヒデアキ君に会った。彼は京都アナ研のメンバーで、パリの友人の許で一年程ヨーロッパに滞在すること。ここには一週間はかりて、その後イタリアへ行くといっていた。彼とはその

夜CIRAの図書室で枕を並べて寝たのだが、もう一つうちとけなかったようで気になったが、日本での再会を約して別れた。外国で会った日本人どうしはなんとなくこちなくなるのかななどと思ったりした。ジャネットはその日のうちにパリに戻るといっていたが、彼女もCIRAで一泊することになった。

二十四日の朝、もう一日CIRAに留って調べものをするというボナンノを残して、レッジョひとりを道案内にミラノへ向った。ロザンナからミラノまでの約六時間、レッジョとほくたちは互いの言葉の癖に慣れ、少しづつ話し合えるようになってきた。ギリシャ的容貌のすばらしい美人の娘を連れたユーゴの夫婦と隣り合った。ユーゴのたばこをもらった。

#### イタリア

二十四日午後ミラノ市にはいった。この日から八月九日パリのホテルに戻るまで、約半月ほくたちは北の端から南の端までイタリアを縦断し、多くのイタリア同志に会ったが、その間の費用はレッジョがもってくれた。レッジョはこのイタリアではすでに働くことができない。金がなくなるとスイスやフランスへ出稼ぎにいき、土方、人夫、大工、ペンキ屋、電気工事などなんでもやるらし

い。万年失業者の彼に金のある訳がない。イタリアの行った先々で彼の『フィアコラ』の誌代が集められ、それがイタリア旅行の費用になった。ぼくたちのイタリア旅行を楽しいものにしようという気配ってくれた。多くの同志に会いたいというぼくたちの希望のために、いろいろ骨を折ってくれたが、どこへ行ってもヴァカンスのためほとんどの同志は不在であって、希望どうりにはならなかった。最も期待したアンコナとリミニの訪問は、会うことはむずかしいというレッジョたちの言で断念したが残念だった。

イタリア旅行中、血なまぐさい話をきかされた。イタリアの弾圧は厳しく、警察とファシストによってこの十年間にすでに十人のアナキストが殺された。一九六九年、ミラノ市のジュセッペ・ドネリ（一九二八～六九・十二・十六）の謀殺に対する烈しい抗議運動はイタリア全土でつづいており、今年の三月ピサのフランコ・マルチーニという二十才のアナキスト・労働者が路上でファシストに襲われて殺された。イタリア旅行中、ファシストということをしきるときいた。これはいわゆる右翼政治結社で、資本家と大地主の親衛隊である。これがアナキストを目的とし、いちばん危険な存在だということだ。レッジョはいつ暗殺されるか分らないと笑っていた。イ

タリーでは非暴力のアナキスト運動は考えられないとぼくの会ったアナキストはすべてそう語った。ボナンノは新聞で政府攻撃の記事を書いたため二度逮捕され、最初は軽くすんだが、二度目は六カ月牢に放り込まれた。今年の夏の初め牢から出たばかりだといっていた。彼はミラノでローマ銀行の銀行員だったが、間もなくびになリ、その後教師をしていたが、これもくびになった。レッジョと同様今はどこにも就職口がない。女房に食わしてもらっている。飯の種のためかねて、フランコ・レッジョの協力で『アンダグラウンド』というアナキズム出版社を始めた。売れゆきはよくないと笑っていた。彼の書いた政府批判がどんなものかぼくは知らないが、そのために逮捕されたことは、イタリアのきびしい弾圧の様子がかがえる。

ほとんどイタリア全土に大小のアナキストグループと個人が存在し、それらが全国的絶縁を結成し、さらに地方連合を組織し、縦横に網の目のように連けいしている。その罫子は理想的な形に近い。但し、まだ未完成である。一グループの規模は特に大きいことはない。三人ぐらいのグループから大きいのは二十人ぐらいである。全国的組織は三つある。その一つは、GAF（ガフ。アナキ

ストグループ連盟）。センターはミラノ市。機関紙リヴィスタ・アナルキア、月刊七千部。この組織は三者の中で一ばん新しい、そして最も戦斗的である。その二、FAI（ファイ。イタリアアナ連）、ローマ市にセンターがあり、機関紙ウマニタ・ノヴァ、月刊三千部。伝統的組織で参加グループ数はいちばん多い。その三、GIA（ジア。進取のアナキストグループ）、センターはアンコナ市。機関紙はインテルナチオナレ、月刊三千部。三者の中で一ばん小さい。イタリアにおける第一インターを名のっている。GAFとGIAはFAI（イタリアアナ連）に対し批判的である。以上の三つの他にもPO（無産労働者階級）、SL（急進無政府主義）など全国的組織は二、三あるが、いずれも規模はごく小さい。それらの中の一、SL（急進無政府主義）は、アルフレッド・ボナンノが編集発行人で同名の機関紙を月刊二千部発行している。カタリーニャ、ヴェネチア、ピサ、ミラノにそのグループがあり、イタリアの現状に即応した運動を進めようとしている。

これらの全国組織は縦糸で、横糸は地方の連合体である。ミラノ市には十五の種々の傾向のアナキスト・グループがあつて、これらのグループでミラノアナ連が結成されている。GAFのグループ、FAIのグループ、G

IAのグループ、SLのグループらがこれに参加している。ミラノではアナキストだけのマニフェスタションが組織できるということである。その数およそ千五百人、シンパを含めると三千人の動員が可能だと誇らしげに語るのをきいた。その他ピサ連盟（主体はピサ大の学生）、トスカナ連盟（フィレンツェ、ピストイア、ピサ等のグループ）、リヴォルノ連盟、ボローニャ連盟等がある。

その他活発な運動のある地方を挙げると、トリノ（エリゼ・ルクリュ社会研究サークルなど）、サヴォナ、ジェノヴァ、ベルガモ（アナルコ・コミュニスト運動）、ヴェネチア（ヴェネチア連盟）、トリエステ、カララ（カララ・コミュン）、リミニ、チヴィタベキア、ナポリ（クロンシュタットグループ）、プリア、シラクサ等に大きなグループがある。これらの地方連盟とグループは主として行動を目的として、自身の発行物をもつものは少ない。そのほとんどがウマニタ・ノヴァ、リヴィスタ・アナルキア、インテルナチオナレ等の配布販売を受けもち、あるいはそれらをテキストにして学習をしている。

ピストイアの『ヴォロンタ』（アウレリオ・ケッサ）、ラグーサの『フィアコラ』（フランコ・レッジョ）とカタリーニャの『アンダグラウンド』（アルフレッド・ボナンノ）によってアナキズムの本が出版されている。『ウ

『オロンタ』は定期刊行の理論誌、『フィアコラ』は文庫この両者の出版活動は長い。これらはイタリーアナキズム運動の精神的糧として長年重要な役を果している。

さて、ミラノに着いた日の夕方、警視庁前でジュセッペ・ビネリの抗議集会とデモがあるので、ぼくたちも一緒に行くことを希望した。レッジョを始めみんながエスカレートした場合、非常に危険だから君たちは旅行者で他に目的があるのだからといって反対した。ぼくたちはみんなの意見に従った。

アウグスタ・ファウロおぼさんのところで世話になることになった。レッジョは多くの同志が彼女の世話になっていると紹介した。彼女は今はヴァカンスで人がいないから静かだといった。彼女のアパートはミラノ市のど真中にあり、すぐ近くにミラノのドゥオモ、スカラ座、エマヌエル通りがある。彼女の部屋の下の通りは銀行や商店が並び、車も通るし、市街電車も走っている。相当やかましいのだが、彼女はいまは静かだという。若い男女数名が顔をのぞかせ、ビネリの抗議集会に行こうと誘いに来た。アウグスタおぼさんは、じゃあ、行ってくるね、と帽子を被り、買物籠を提げて出ていった。デモの後、みんなで一緒に夕食をしようということになった。

集、発行、発送等の事務や雑用をやっている。こどもヴァカンスで他の仲間にはみな留守だという。アントニオが連絡をとる。ローマ大の学生パオロ・フィンチ（リヴィスタ・アナルキアの主張を書いている）とアメデオ・ベルトロ（教師。クロセネラ・アナルキア紙を発行）が来る。彼らの顔なじみのレストランで一緒に夕食をとる。ベルトロはカララ国際会議で大沢正道さんに会ったといっていた。パオロが達者なフランス語と英語で通訳する。ベルトロが三十四才。他はみな二十代。夢中になって夜中まで話し込んだ。パオロの車でアウグスタのアパルトマンに帰った。もう寝ていたおぼさんが起きてきて、『午後ボナンノが着いた。みんな集まって食事しよう』と待っていたのに。見てごらん、テーブルを。フランコ、いい年をしてこんなに遅くまでみんなをひっぱり回して』とおこる。フランコ・レッジョは、ぶつぶついついているおぼさんをだめすかして、寝室へ連れていった。パオロはニヤニヤ笑いながら、部屋を片ずけて寝台を作った。

二十七日早朝フィレンツェに着いた。始めレッジョたちの希望でここに二泊の予定だった。朝はだれもいないからフィレンツェの同志の訪問は午後（ヨーロッパで午

ぼくたちが日本人ということで米の料理をしようか、ロンバルディアの米は旨いぞという。米は日本産の方が旨いにきまっている。いつも食べているから、それよりスパゲティが食べたい。それではレストランへ行こうと、十人近い人数でレストランへおしかけた。イタリー人の食事は太へん賑やかで大勢でわいわい言いながら食べるのが好きなのだ。イタリーのどこのレストランでも大抵の人数でわいわい言いながら食事しているのを見た。イタリー人のもてなし方は、喰え喰え、飲め呑め、とすすめることにあるらしい。自分の皿の料理を一口食べてみて、これは旨いから喰えといって喰いかけのものを分けてくれる。始めのうちはあまり気色が悪くなかった。うっかり料理をほめようものなら、気に入ったのならもつと食べると皿を山盛りにする。ミラノの最初の食事は死ぬ思いであった。

アウグスタおぼさんの部屋へはいろんな人間が出入りしていた。アナキスト、マオイスト、エスペランチスト等種々雑多の傾向が、彼女を介して交流し、一種の家族的雰囲気を作り出していた。この家族的雰囲気はイタリーその他のところでも感じた。イタリーに似たものをスペイン人の間に見出すことができる。

翌日、『リヴィスタ・アナルキア』を訪ねた。アントニオとリリアナの若い夫婦とチエザレの三人で新刊の編

後ということとは二時以降のことにして、その間ピストイアへ行くことにした。ここには『ヴォロンタ』の住所があるのでぼくはぜひ行きたかった。フィレンツェから三十分程で、中世の街並が残っている古い町だ。イタリーのアナキスト運動の中で『ヴォロンタ』の名は古い。ぼくは一九二一年ジェノヴァ発行の同名の新聞を見たことがあつた。『ヴォロンタ』について詳しく知りたいと思っていたが、『ヴォロンタ』の発行人アウレリオ・ケッサは不在であつた。後で知ったところでは、ぼくたちといれちがいにスイスのCIRAを訪問し、パリにも行っていたそうだ。現在の『ヴォロンタ』は彼の発行で、新聞ではなく雑誌である。彼は二十五年続いている。十年ほど前ジェノヴァからピストイアに移った。CIRAのマリ・クリスチーネはケッサを最も信頼できる同志の一人だと言った。彼はいなかったが、他にも同志がいるから探してくるといつて、レッジョは出かけた。カフェで待つ。二時間ほどして若い女性が車で迎えに来た。ぼくたちはジョルジョ・カルボニの家へ案内された。車でぼくたちを迎えに来た女性は彼の妻で、グラチア。レストランで昼食をする。若い労働者がやって来た。グラチアの妹も加わった。たちまち十名近い人数となる。盛々喰い、がぶがぶ呑み、わいわいしゃべり、大声で笑う。陽



気な食事にほくたちも食欲がすすむ。午後の仕事があるからと若い労働者は帰っていた。仕事の中にがぶがぶ酒を飲んで平気なヨーロッパの習慣にほくたちは少なからず驚いた。午後の仕事は大丈夫なのかしら？

ビストイアの若い労働者たちはヴォロンタに協力していたが、ヴォロンタから独立して、最近新しく彼らのグループを結成した。アナキズム・プロパガンタを計画していると話した。ビストイアの人口は十萬、アナキストはシンパを含めて二十人ぐらい、グループは二つ。レツジヨは、カルボニ夫妻が泊まれといっているからフィレンツェは明日にしようという。

二十八日フィレンツェに戻った。ボナンノは同志に連絡に行ったが、戻ってきて、だれもいないという。ではビサへ行こうということになった。ビサ大の学生ミゲルが駅へ迎えに来てくれた。ボナンノは、彼を若いと思慮もあり、行動力もあり、みんなの面倒もよくみるすばらしい同志だとしきりに賞める。ミゲルはほくたちをビサ連盟の事務所に案内した。事務所はビエドロ・ゴリー通りのはずれにあった。ビエドロ・ゴリーは一九二一年ファシストに暗殺されたアナキストである。ビサ連盟の事務所は私立救急車の車庫の二階。ここは事務所の部屋の

頃連盟事務所へ行ってみると、前田が行方不明だと大騒ぎだった。

二十九日ビサからローマ経由でシシリイのカターニャまで直行する。ローマでシシリイ行に乗り替え、カターニャまで十二時間余り、列車は始発駅で超満員。ホームに入って来た列車に男たちが飛び乗り、席を確保する。女子供は大荷物を抱えて列車を追いかけ、窓からトランクや鞆や子供をさし入れる。ホームはまるで戦場だ。ほくたちはボカンとしてその光景を眺めるだけであった。レツジヨとボナンノが走ってくる列車に飛び乗り、奮闘してくれたのでどうにか座ることができた。大きな身体をもて余っていたボナンノが、実に敏しような動きを見せたので驚いた。彼らがわざわざフランスまでほくたちを迎えに来てくれた訳が分ったような気がした。ほくたちだけだったら、ローマで引き返えしただろう。

カターニャでフランコ・レツジヨと別れた。明日ボナンノがラグーサまで案内してくれることになった。ボナンノは家に二十日ぶりだといった。ほくたちを迎えるまで、イタリー、スイスを回り、パリで本を探していたそうだ。フリーエ、サン・シモン、オーギュスト・コント

外に大きな集会所がある。ヨーロッパの各グループ、各連盟はほとんど自分たちの事務所をもっている。これは非常に羨しかった。ビサ連は自身の発行物をもたない、ウマニタ・ノヴァとヴォロンタの配布と販売をひきうけていた。ミゲルがビサ大の学生運動のリーダーということもあって、ここは学生が主体であった。ほくたちが事務所に着いたとき、二人の老アナキストとヴェネチアの若い労働者が二人来ていた。老人たちはいまはもう働いていないから毎日暇つぶしに事務所へ留守番にきている。ヴェネチアの若い労働者は二人ともSL（急進無政府主義）グループのメンバーで、ボナンノが彼らの先生といったところ。テブレコーダにとった自分の論文をボナンノとレツジヨに批判してもらい、熱心に聴いていた。またもやビサで一泊することになった。ミゲルの世話でみんなあちこちに分宿することになった。ほくは二人のヴェネチア青年と共に、あいづらはトロッキストだとミゲルがいついていた若い夫婦の住居に厄介になった。翌朝七時頃ほくは目覚めた。みんな九時過ぎにならないと起きて来ない。ブラインドを開けて部屋を明るくする訳にもいかない。暗い部屋の中でみんなの起きてくるのを待つのは退屈だったので、ひとりでビサの町を見物することにして、置手紙をして出かけた。斜塔を見物して屋

とその他フランスのアナキストの本を買ったそうで、これらを翻訳するのだと言っていた。彼の本棚でエミール・アルマン（仏。一八七二—一九四五）の『個人主義アナキズム入門』を見た。彼はこれをイタリー語に翻訳して出した。ほくは後にフランスでこの本を探し回ったが見つけることができなかった。ボナンノのイタリー語訳を送ってもらい以外方法はなさそうだ。

ボナンノには子供が二人ある。この九月一年生になる男の子と六年生になる女の子。夫は失業中、わずかに大学の評論に論文を書いて原稿料をもらう程度、妻が働いて四人家族を養っている。陽気な夫婦にはそんな困窮のかけはみられない。また、客に対して体裁を繕おうとしない。ピクルスやオリブの瓶詰の空瓶をコップにして、ほくたちにぶどう酒をついでくれた。ほくたちはこの旅行で多くのヨーロッパの友人の家庭を訪問したが、彼らは例外なく夫婦共働きであった。それは経済的必要からであることはもちろんである。しかし、女が働くことにただ貧しいから女も働かざるをえないといった消極的な姿勢は見られなかった。女が職業をもち、働くということにむしろ女自身が積極的であり、前向きであった。いわゆる女房稼業を望む女性は一人も見出すことはできなかった。ヨーロッパの女の積極性をいたるところで見

た。ぼくたちが会ったヨーロッパの同志は夫妻が共にアナキストであった。イタリア、フランス、ベルギー、オランダ等においてすべて例外はなかった。夫婦でぼくたちとのディスカッションに加わり、夫も妻も自分自身の意見を堂々と述べた。これは日本ではきわめて稀にしか見ることでない光景であった。

七月三十一日、ボナンノのぼろ車でラグーサに向った。フランコ・レッキョは数年前妻と離婚し、いまは独り暮らしだ。離婚のいきさつは知らない。興味がないのでききもしなかった。多分彼のアナキズム馬鹿にあいそをつかされ、逃げられたのだろうと勝手に決めている。二階建の家に独りで住んでいる。屋根裏部屋まで本、新聞その他の印刷物の山だ。その谷間にベッドを置いている。ぼくたちはそのうち本の下敷になって窒息するだろうとかなかった。ぼくたちも本に埋まって寝た。十五年前日本に來たことのあるベネズエラのビクトル・ガルシアの家族の写真があった。ガルシアが送って來たもので、『寿』と朱書してあった。(この旅行中パリでガルシアと会った)。ここでメキシコの『土地と自由』社が発行した『エンサイクロペディア・アナルキズム』を見た。日本の項はガルシアが書いたもので、山鹿泰治の『老子直解』

が紹介されていたが、その写真版が上下さかさまに印刷されていた。レッキョにこれはさかさまだと教えると、日本語の分らない奴ばかりでしようがないと笑った。後でガルシアはちゃんと教えておいたのに、メキシコで印刷する時間遅えたのだ、どうもまずいことだと苦笑していた。まだ一冊しかできていないが、全四冊で完成する。またフランス語版も計画しているということだ。

ラグーサの町は山の斜面にあり、通りはかなりきつい坂だ。町から眺める四囲の景色は、深い谷とその向うに白い石の露出した山ばかりで、荒りようとした孤独な眺めである。人口五万のこの町にレッキョのことを知らない者はない。レッキョが町を歩くと子供たちがアナキスト、アナキストと呼びかけてくる。ここにはレッキョの友人が十人ばかりと若い同志たちが十名ばかり、シンパをいれると五十名ばかりになる。マニフェスタションにおける動員は千名ぐらいい。ここでもやはり若い仲間が事務所を設け、無科学習塾を開いて子供たちの勉強を見てやったり、ウニタ・ノヴァをテキストにして学習などをやっている。このグループのリーダー格のビッポは十九才、ジーノ、ジョルジョ、アンジェロたちはみな同年輩の若者たちだ。

レッキョはぼくたちのためにラグーザ海岸でキャンプ

を計画し、またキャンプの後、田舎へ行こうと言ってくれたが、これはぼくたちの日数が許さなかった。彼らがヴァカンスを楽しむというのは、山や海や田舎へ行つて飲んだり、喰ったり、ただもう何もしないで遊んで暮すということらしい。レッキョは海岸の町並から三キロ離れた所にテントをはった。人間はぼくたちだけだ。飲料水は大きなタンクにいれてもってきたが、身体を洗う水がないから海水に浸った身体のまま三晩過ごさねばならなかった。最初の夜は身体がべとついて眠ることができなかった。レッキョたちは平気だ。海に入り、海岸で遊び、昼寝をし、腹が減ったら飯をくいしてすごした。彼らはここで一週間すごすつもりだったが、ぼくたちの時間がないので三日できりあげた。レッキョとラグーサの若い仲間たちが見送ってくれた。最後の昼食はなんとなくみんな食欲がすまない。平山は別れを惜しんで泣く。『フサコは良くない同志だ。アナキストは泣いてはいけない。強くなければならぬ』と顔をくしゃくしゃにしてレッキョは言った。

## フランス

シシリーからパリへ戻る途中、ローマに立ち寄り、フ

ランコ・レッキョの紹介状をもってウニタ・ノヴァを訪ねた。戸が閉まり、だれもいない。近くのカフェで時間をつぶし、再び訪ねてみたがやはり戸はしまっていた。諦めて、ローマ見物をして出発した。ローマにはFAIの他にORRAのグループその他がある。

八月九日、パリのホテルに着いた。翌日から早速、デイジョン、再びロザンナ、ブリュセル、アムステルダム、ロンドン、マルセイユ、ボルドーの各都市を回った。パリに落ち着いたのは八月も二十日を過ぎてからであった。

フランスのアナキスト運動は複雑であつて、うまく整理して説明することができない。できる限り正確な知識をえようと心がけたが、それは仲々むずかしいことだった。フランスの場合、各グループ、各個人はそれぞれに独自の運動をし、これら各グループ、各個人の間に密接な連けいがあるとは必ずしもいいがたい。むしろ常時互いに批判し合い、その批判が敵意に変わるといった傾向があり、ぼくたちが行った先々で相手の悪口をきかされた。いずれの情報も正しいか判断しかねたのである。このようなフランスの現状についてぼくたちはフランスの会う人毎にイタリアと比べてどう思うかと尋ねた。フランスにおいてもイタリアのあり方を認める点においては

みんな同じであった。しかし、すべてがここではそれはむずかしいと答えた。

F A F (フランスアナ運) はフランスにおける最大の全国的組織である。参加グループ数についてA O A は三十、O R A は五十、F A F 自らは百二十といった。どれがほんとうかぼくたちには判断できない。グループ加盟が原則である。機関紙ル・モンド・リベルテールは月刊二千部。通行人が立ち寄り、新聞や本を買って行く。その存在はすでによく知られていることが分る。モーリス・ジョワイヨの評判はよくなかったが、彼は今は隠退し、機関紙に原稿を書いているが、F A F は若い人たちに代わっている。シャンソン歌手のジョルジュ・ブラッサムはかつてル・モンド・リベルテールの店番(?)をやったことがあるが、モーリス・ジョワイヨと仲は良くない。

O R A はF A F を目の敵とする。F A F もO R A に対し憎しみを露骨に見せる。O R A (革命的アナキスト組織) は機関紙フロン・リベルテールを月刊二千部発行している。学生が主体である。六九年にF A F から分れ、O R A を結成した。O R A はコミュニスト・リベルテールを自称し、O R A を中心とした組織づくりを意図し、O R A への力の結集を呼びかけている。コミュニスト・

リベルテールの傾向はこれ以外にO C L (コミュニスト・リベルテール組織)、F A C O (全仏アナルコ・コミュニスト組織)、T A C (アナキスト・コミュニスト評論) などがある。O R A はこれらのコミュニスト・リベルテールのO R A への参加を呼びかけており、いま二十のグループがO R A に結集していると語った。連合体を主唱するF A F とO R A を中核とする組織を考えるフロン・リベルテールとの間は決定的に違うものがあるといえるかもしれない。ル・モンド・リベルテールも若者たちが絶えず出入りしていたが、落ち着いてしまったような雰囲気があり、一方のフロン・リベルテールはいくらでも仕事があるといった忙しい空気だった。O R A はA S (アナルコ・サンジカリスト同盟) に参加を呼がけて拒められたといつて、A S は小げなグループで元々眼中になかったと負け惜しみを言っていた。

A S は労働者の組織で、機関紙ソリダリテ・ウヴリエ (労働者の連帯) を月刊二千部発行している。パリとボルドーとレームとの三つのグループで結成され、O R A のいうようにメンバー数は三グループの合計で四十名である。彼らはC F D T の組合員で、組合内におけるアナルコ・サンジカリズム運動と同時にアナルコ・サンジカリズムの労働組合を組織しようと努力しているのだと説

明した。ここは種々の職業の若い労働者の集まりで、責任者のジャク・ツブレは活版印刷の植字工だと言っていた。みんな真面目な青年たちで非常に気持よく話し合えた。彼らは日本に強い関心を示した。しかし、日本についてまるで知らない。幸徳や大杉さえ知らなかった。ぼくは日本のアナキズム運動をどしどし輸出しなければならぬと思った。彼らはアナルコ・サンジカリズムの国際連帯を希望していたが、アナルコ・サンジカリストのグループあるいは組合は仲々見つからないということだった。彼らはC N T と連絡はあるが直接の接触はなく、F A F については、組織があるが実践がないと批判的であったが、運けいしている。但しF A F に加盟していない。

C N T・A I T はパリ、マルセイユ、ツールズ、ボルドー等にそれぞれセンターがある。これは亡命スペイン人の組織なのでつうC N T・スペインと言われている。パリから『ル・コンバ・サンジカリスト』、ツールズから『エスポワール』が発行されている。二年毎に定例会議(フランス地方)を開いている。今年八月十九日から一週間マルセイユで開かれた。ぼくたちはマルセイユでこれに出席し、議長壇に引っぱり出されて、挨拶させられた。この会議には百人をこえるフランスに住

む亡命スペイン人が出席していたが、白髪の老人ばかりで若者の姿はほとんど見られなかった。スペイン戦争の元女大臣ヘデリカ・モンセーニもツールズから出席していた。ぼくたちは、パリ、マルセイユ、ボルドー(マルセイユ会議のためツールズは空とのことで行くのはやめた)のC N T を訪ねたが、老人しか見なかった。亡命スペインの二世は、親父たちの頭の中はスペインのことしかない、彼らは世界的視野での運動を知らないとか批判し、そして父母が亡命中という特殊な環境にあることは理解できるし、同情もしている。しかし、われわれはフランスで生まれ、育ったフランス人なのだ。父たちと事情がちがう。われわれにはわれわれの生き方がある。父たちの後に続こうとは思わない。と自分たちの立場を説明した。スペイン革命から三十七年の才月を見た思いであった。

C N T の動きがスペインに限定されているという批判は、亡命スペイン人の中にもあり、彼らはC N T・スペインから分れ、彼ら自身の運動をしているものもある。とはいえ、彼らも亡命スペインであり、スペインへ帰えることを目指していることには変わりはない。日本へ来たことのあるヴィクトル・ガルシアなどはその一人である。亡命スペイン人のイルデホンソ・ゴンザレス(六四

才)は山鹿泰治の友人で、ガルシアは彼の紹介で山鹿を訪ねて来たのだ。イタリアの『ヴォロンタ』のアウレリオ・ケッサがゴンザレスのところで泊ったことをきいた。メキシコの『土地と自由』のガルシア・ブラダスがロンドンでいまでも健在であることを知った。そして、ゴンザレスはガルシアが夫人と一緒にいまパリに來ているとおしえてくれた。彼の連絡でガルシアがぼくたちのホテルに訪ねて来た。ハキナ・ドラド夫人の住居で彼ら夫妻とリベルトとホセたちと会食した。ガルシアはエール・フランスの職員で、ただの飛行機を利用して、毎年五十日のヴァカンスを世界中を飛び回っている。来年は東南アジアへ行く、二週間ほどの予定で日本へ来たいといっていた。ドラド夫人は七年間のスペインの牢で持病を得た。リベルトはスペイン戦争の負傷痕が痛む。スペイン戦争から三十七年、ぼくたちには歴史の一頁として写るが、亡命スペイン人にとってはいまだお生々しい記憶なのである。ドラド夫人のところにシシリーのフランコ・レージョとアルフレッド・ボナシノの二人が、ぼくたちを迎えるまでの間厄介になっていたそうだ。みんな一本の糸でつながっているということだ。ガルシアが『山鹿さんはぼくの先生なのだ』といった。ぼくは嬉しかった。

CNTを批判するものの一つにCNT・フランスがあ

た。ぼくたちも大いに迷ったが、予定がたらず断念した。イタリアでもそうだったが、ぼくたちの旅行を楽しむためには予定など邪魔だ、忘れてしまえといわれた。

ディジョンから再びロザンナへ行った。CIRAのマリーの夫はブルガリアのアナキストである。亡命の夫に代って今年ソフィアの親類を訪ねたときの話をきいた。スイスでも見かけない立派な建物と設備の整った高級官吏用の病院はガラ空きで、一般市民の病院はいつも満員、ベッドのシートも汚れてどろどろ、それはひどいものだと憤慨していた。マリーはぼくたちにアナキストの組織についてどのような意見をもっているかを尋ね、彼女は会う人毎にこの問題について真剣に考えるように問いかけているといった。ここでデンマークの若い夫婦に会った。夜半まで話し合った。デンマークでは社会主義運動は弱小である。労働運動もほとんどない。共産党も微々たるもので、議会に勢力をもたない。アナキスト運動はいま始まったばかりで、連盟は結成したが、メンバーは十五名である。プロパガンダ紙を計画している。スウェデンとは連絡がなく、スウェデンのアナキストは六八年に解散したがすぐ再組織した。昨年また解散し、いまは存在しないということしか分らない。スウェデンと連絡する

る。この事務所はドラド夫人の筋向いにあった。かつてはフランス語で『ル・コンバ・サンジカリスト』を出していたが、いまは廃刊。新しいものを計画中。CNT・フランスがCNTの運動はスペインだけのものではないという考えから、フランスのCNTを結成したのである。これも正しくは単にCNT・AITである。CNT・フランスは通称。アナルコ・サンジカリズム運動を目指す。ASとは互いに連絡がない。ぜひ知り合うようにすすめてきた。

シャトー・デュ・ロワールの集会で知り合った同志ミシェル、パトリック、フランソワーズの三人からディジョンに招待された。ディジョン市を中心とするブルゴーニュ地方は、赤ぶどう酒の名産地である。ミシェルは三十一才、ディジョン駅に勤める国鉄職員、妻のジョゼは小学校教師、夫婦の間に四カ月の男の子がある。パトリックとフランソワーズは二十一と二十四の新婚の若夫婦。フランソワーズはAOAのレイモン・ボートンの姪である。ミシェルもパトリックの夫妻もAOAには批判的で、みんないい人なのだがと首をかしげていた。ミシェルはアルビニスト。今年のヴァカンスはモン・ブランの麓シャモニーへ行く。夫妻は一緒に行こうと熱心に誘ってくれ

よう努力するといっていた。彼らはここで一週間アナキズムの勉強をして帰るといっていた。

CIRAで会ったバス・モレルの紹介でアムステルダム『社会科学国際研究所』にルドルフ・デ・ヨルクを訪ねた。彼は研究所のアナキズム部門の担当者である。研究所に各国の社会科学関係の資料が集められている。日本に関する資料は極めて少なく、社会主義関係では賀川豊彦、片山潜などの著書がいくつかあった。アナキストの出版物は『リベルテール(発行人 三浦精一)』が唯一のものであった。総評新聞や経団連の定期刊行物などが送られている。日本のアナキズム運動に関するものならどんなものでも、チラシでもよいから送ってほしい、研究所の資料としたいからと協力を頼まれた。ただし、研究所には日本語の理解できるものはいない。

デ・ヨルクはオランダ国立美術館のそばにぼくたちのためにペンションを探してくれた。この美術館にはレンブラントの『夜警』がある。ぼくたちには見る時間がなかった。その夜兵士の組合集会有るという。あまりきいたことのない兵士組合ときいて、興味をわいた。バス・モレルはその組織者のひとりということ、のぞいてみる。モレルの説明では、徴兵兵士の軍隊内外における



諸問題の解決と徴兵拒否という形ではなく、徴兵された兵士の軍隊内での反戦運動を組織する。組合集会のオランダ語の演説、討論はぜんぜん分らない。十五分程で外へ出る。オランダ・アナ連の若い労働者に案内されて、『飾り窓の女』を横目で見ながら、ごちゃごちゃした横町を通ってオランダ・アナ連の溜り場へ行った。

オランダの反体制運動は六八年以後のことではいま芽が出なかったところ。アナキスト運動も日が浅い。アナキスト連盟を結成したが、種々の傾向が寄り集まっている。ここではフランスやイタリーのように何タイストと自称あるいは他称するほどその傾向は明確ではない。諸傾向の要素がいろいろ混ってそれをアナキストと総称しているようである。彼らの最大の関心は労働運動で、組合作りとそのアナキズム運動の興りが課題である。

ベルギーは個人的訪問でこれといった話はない。フランス国境に近い炭坑町でベルギーの炭坑労働者の家庭を垣間見たことと、亡命ポーランド・アナキストに会ったことぐらいだ。こんどの旅行は不思議と東欧の話に耳にした。

ロンドンでは安宿を見つけることができず、着いた日の夜行でパリへとんぼ返りした。ロンドン行きの際、パリの北駅でロンドン行きだから切符売場も英語が通じる

と思って、英語で列車の時間、座席、運賃などを尋ねた。答えはフランス語で戻ってきた。暫くの間、英語で尋ね、フランス語で答えるという国際的会話が続いた。ロンドン行きの列車に二人の日本人青年と同席した。彼らは北欧、ドイツ、スイスを旅行してフランスへ着いた夜、紹介されたホテルを探して幾度か通行人に道を尋ねた。パリ人は親切に教えてくれるのだが、彼らはフランス語で教えてくれる。英語しか分らないわれわれには何を言っているのかさっぱり分らない。とうとうホテルを見つけていることができず、夜中になって通りがかりのホテルに飛びこんでようやく寝ることができた。フランス人は英語が分るのに英語を使わない。フランス語のわからないわれわれには不自由でどうしようもない。フランスを逃げ出して来たとはやっていた。ディジョン駅でイギリスの青年がぼくたちに通訳してくれと頼みにきた。試みにぼくたちも案内所で英語を使ってみた。英語はだめですともるでそっけない。フランス人気質の一端をうかがえる体験であった。

『フリーダム』を見つけるのに意外と手間どった。通行人に道をたずねれば、みな親切なのだが、ちがったところを教えてくれる。一緒になって探してくれたが分らない。それは、たとえば山下町と山下通ぐらいのちがい

なのだが、同じどこを何度もいったりきたり、やっと探しあてたが、午前中を棒にふった。『フリーダム』に

来たが、前夜の夜行でドーバーを越えた睡眠不足も重なって、疲れきって元気がない。留守番(?)はおぼあさんひとりだけ。しばらく話をしてすぐ出た。レストランでは酒がでない。食事しながらワインをのむフランス、イタリーの習慣になじんだ後、食事はレストランで、飲み物はバーというロンドンの食事は陰気で面白くない。バーは紳士用と労働者用のしきりがある。レストランでトイレを借りようとすると、レストランにはトイレはない。その公園の公衆便所(有料)へ行けとぬかす。公園を探すがトイレは仲々見つからない。それもその筈、バックingham宮殿の真前だ。女王様のお住居の前に公衆便所がある訳がないと大笑い、駅へいそぐ。そんなこんなでぼくたちのロンドン行きは面白くなかった。CIAで紹介されたニコラス・ウォルタ、ガルシヤ・ブラダス、ブラック・フラグ、WRI、サンジカリスト・労働者連盟などの訪問は果せなかった。

九月八日AOAのボートン夫妻、ロベール・ダリアン(オール空港勤務)とブリュセルのギイ・パドーが見送りに来てくれた。空港ロビーのカフェで日ワインで乾盃、ヴィヴ・アナリシといってぼくたちは別れた。

#### イオム一号(一〇〇円 五五五円)

冬眠つれづれ帖(河本乾次) プラティック(平山房子) インタナショナルの組織(バクーニン) 詩・挽歌(山口英) 書評・小松隆二(日本アナキズム運動史)(戸田広介) 大逆事件東上記(向井孝) 想い出すまま(高島洋)

#### イオム二号(一五〇円 五五五円)

梅雨奇想雑語(河本乾次) クロボトキンの手紙(前田幸長訳) 詩・豆字典(日野善太郎) 挽歌(山口英) 金子文子の二つの死(戸田広介) 加藤一夫論(塩長五郎)

神戸市聳合区上筒井通八丁目二二の六

前田幸長方 イオムの会